周恩来・池田大作の会談内容に関する調査

堀　口　真　吾

本年 2024 年は、本学の創立者池田大作先生の初訪中（5 月 30 日）より 50 年、併せて、第二次訪中での周恩来総理（当時）との会見（12 月 5 日）からも 50 年の節目となる。創立者は、この一期一会の場を“周総理から日中友好の未来が託された会見”[1] であったとして、当日の様子を、これまで様々な場面で本学学生に伝えてきた。

本資料紹介は、1974 年 12 月 5 日の 21 時 50 分から約 30 分間にわたって中国人民解放軍「第 305 病院」にて行われた、創立者と周恩来総理の実質の会見内容に関する資料の紹介である。

当時の両国の新聞報道に加え、特に創立者自身の執筆、発言部分を中心に収集したものであり、できる限り初出の資料名を掲載した。また資料の出典は、見出し、または註に付し、後に出版された書籍名、及び『池田大作全集』に掲載がある場合は全集の巻号も記載した。紹介は発表順の編年形式とし、文章の表記は『池田大作全集』に合わせた。また最後に附属資料として、創立者が執筆した小説『新・人間革命』[2] の該当箇所を付けた。

今回紹介した以外にも同種の資料はまだ多くあると思われる。当然、中国側の資料として総理の会見記録も当局に現存することであろう。約 30 分という会見内容の全てを網羅しているものではないと考えられるため、さらなる資料については、今後の収集、研究に委ねる。

闘病中で病床にあった周恩来総理、その体を慮って日本側は創立者と香峯子夫人の 2 人だけが会見に入り、夫人がメモをした。2005 年に主婦の友社から出版された『香峯子抄』には、創立者夫人にインタビューした際の、当時の会見の感想が以下のように記されている。

「二度目の訪中の最終日でした（昭和四十九〈1974〉年十二月五日）。答礼の宴も終わった後、北京の夜道を車で案内されました。周総理が、入院しておられた三〇五病院で私たちを待っていてくださったのです。会見は夜九時五十分からでした。総理のご体調を案じて、会見は少人数に

Shingo Horiguchi（創価大学池田大作記念創価教育研究所）

[1] 2008 年 12 月 3 日大連大学「名誉教授称号」授与式メッセージ

[2] 創価学会の歴史と山本伸一（= 池田大作）会長の生涯を描いた長編小説であり創立者の代表著作。全 30 巻 31 冊

し、私のみが同席させていただきました。記者の方もおりませんので、私が必死でメモをとったのです。周総理は厳然といらして、闘病のご様子など、少しも見せられませんでした。(『香峯子抄』2005 年 2 月 27 日発刊 主婦の友社)」

会見 50 周年という慶節を機に、創立者が各所で伝え残した本会見内容であるこれらの資料群が、両国の研究者にとって有益なものとなれば幸いである。

末筆に、創立者ご逝去の報に接し、衷心より深く哀悼の意を表するものである。

「人民日報」1974（昭和 49）年 12 月 6 日付 第 1 面

周总理会见池田大作会长等日本朋友

同池田大作会长和夫人进行了亲切友好的谈话

新华社一九七四年十二月五日讯　　周恩来总理今天在医院会见日本创价学会会长池田大作和夫人池田香峰子，以及以池田大作会长为团长、山崎尚见副会长为副团长、原田稔为秘书长的日本创价学会第二次访华团全体团员，并且同池田大作会长和夫人进行了亲切友好的谈话。

参加会见的有廖承志、王连龙、林丽韫、孙平化。

右下图：周恩来总理十二月五日在医院会见了日本创价学会会长池田大作和夫人池田香峰子，以及以池田大作会长为团长的日本创价学会第二次访华团全体团员。这是会见时合影。　　新华社记者摄

（日本語訳[3]）

周総理、池田大作会長ら日本の友人と会見

池田大作会長夫妻と和やかに友好的な対話

新華社通信、1974 年 12 月 5 日、本日周恩来総理は病院にて、池田大作会長と池田香峯子夫人、また、池田大作会長を団長、山崎尚見副会長を副団長、原田稔を秘書長とする創価学会第二次訪中団と会見し、池田大作会長夫妻と心温まる友好的な対話を行った。会見には廖承志、王連龍、林麗韞、孫平化が出席した。

右下写真：12 月 5 日に病院で創価学会の池田大作会長、池田香峯子夫人、池田大作会長を団長とする創価学会第二次訪中団と面会する周恩来総理。これは会見時の記念撮影。新華社通信記者撮影

---

[3] 執筆者訳

「参考消息」1974（昭和 49）年 12 月 7 日付 第 5823 号

共同社报道《周总理会见池田会长》

【共同社东京十二月六日电】题：周总理会见池田会长

中国总理周恩来五日晚十时，在北京市内的医院会见了正在中国访问的创价学会会长池田大作率领的代表团一行。周总理精神极其饱满的迎接代表团一行，一一问候，并一起照了像。然后池田会长和夫人留下来同周总理继续会谈。

据池田会长会见后透露，周总理说：**“请代问候三木新总裁。**（在谈到增进日中友好关系时）**中国同三木先生一样，也在考虑”、“希望能够早日缔结日中和平友好条约。”**周总理还一怀念的心情回忆他在一九一九年**“樱花盛开的时候”**结束了在日本的留学而回国时的情景。池田会长说：**“请在樱花开放的时候再次访问日本。”**周总理回答说：**“有这个愿望，恐怕难以实现。”**

总理在谈到中国的内外政策时还说：**“中国决不做超级大国。我们要对世界作出贡献，但在经济上还差得很远。不过，我们有毛主席的领导，中国人民将世世代代继承毛主席的精神。”**

周总理自一月份会见大平外相，四月份会见自民党前议员川崎秀二以来，这次会见日本人还是第一次。似乎可以说这证明中国方面极为重视三木就任自民党新总裁后传来的保证加强日中关系的口信。

（日本語訳[4]）

共同通信による報道「周総理、池田会長と会見」

【共同通信東京 12 月 6 日打電】タイトル「周総理、池田会長と会見」

中国の周恩来総理は 5 日夜 10 時、北京市内の病院にて、中国を訪問中の池田大作創価学会会長一行と会見を行った。周総理は大変元気な様子で一行を出迎え、一人ずつ挨拶し、一緒に記念撮影を行った。その後、池田会長と夫人は残り、引き続き周総理との会見を行った。

会見後、池田会長が明らかにしたことによると、日中関係の友好促進についての話題の際、周総理が「**三木新総裁に宜しくお伝え下さい。中国も三木先生と同じように考えております**」「**日中平和友好条約の早期締結を希望します**」と述べたという。また、周総理は 1919 年に日本留学から帰国した時のことを「**桜が満開の時期であった**」と懐かしそうに語った。池田会長は「**ぜひまた桜の咲く頃に日本にいらしてください**」と伝え、周総理は、「**その願望はありますが、実現は無理でしょう**」と答えたという。

総理はまた、中国の内外政策の話題の際に、「**中国は、決して超大国にはなりません。私たちは世界に貢献しなければならないが、経済的にはまだ長い道のりがある。しかし、私たちには毛主席の指導があり、中国人民は毛主席の精神を世々代々にわたって受け継いでいく**」と語った。

周総理が日本人と会見を行うのは、1 月に大平外相、4 月に川崎秀二元自民党議員と会見して以来である。これは、自民党新総裁に就任した三木氏の日中関係強化を誓うメッセージを、中国側が真摯に受け止めたことの証明と言っていいだろう。

---

[4] 執筆者訳

「聖教新聞」1974（昭和49）年12月7日付 第1面

周恩来首相と最後の夜に会見

池田会長第2次訪中を終え帰国

信頼寄せ合う歴史的出会い

平等互恵、世々友好を確認

21世紀への最後の四半世紀 その意義と重要性語る　会長―周首相

池田会長は五日間にわたる中国訪問を終え六日午後、同行したメンバーとともに元気に帰国した。帰国前の最後の五日夜に会長は周恩来総理と歴史的な会見をし、席上、周首相は**①中国は決して超大国とはならない②中日平和友好条約の早期締結を希望する③文化大革命の意義**、などを語った。

五日午後九時五十五分（日本時間同日午後十時五十五分）、池田会長は周恩来首相と北京市内の病院で会見した。これには、会長夫人、廖承志中日友好協会会長、孫平化秘書長、王連龍北京大学革命委員会主任らが同席、通訳は林麗韞中日友好協会理事があたった。

会長は**八億人民のために元気でいてほしい**旨を述べ、周首相は笑顔でこれにこたえた。周首相は元気な様子で、会長と短時間ではあったが、率直かつ友好的なふんいきのなかで話し合った。

席上、周首相は**①中国は決して超大国とはならない②中日平和友好条約の早期締結を希望する③文化大革命の意義**、などを語った。とくに同首相の「**二十世紀最後の二十五年間は大事な時である。お互いに平等な立場で助け合い、努力しましょう**」との発言は、平和を強く呼び合う意思の触れ合いを強く実感させた。

同首相は**世界各国との友好とそれへの貢献こそ望むところである**とし「**子々孫々まで中国は毛主席の指導と精神を受け継いでいく**」と語った。なかでも日中関係については、中国は日中平和条約が速やかになされることを希望した。

周首相と記念の撮影も行う

また、同首相は懐かしそうに「**私は五十年前、桜の花の咲くころに日本から帰国しました**」と語り、会長は「**桜の花の咲くころ再び日本を訪問して下さい**」と心から述べ、初の会見であったが両者は友好のうちに心を通い合わせた。なお会見に先立ち、訪中団を出迎えた同首相と一行は記念撮影を行った。

年齢を三十ほどへだてたこの二人の会見は、日中関係にとっては極めて象徴的な出来事であり、歴史的な会見といってよい。周首相は毛主席の指導する中国革命のなかに生き抜き、新中国が成立してからは首相として、外交部長として、活躍してきた。

日本軍国主義勢力の侵略と戦い、戦後、日中国交正常化の共同声明に調印した周首相は日中間

の戦争→終戦→国交回復という歴史の舞台にあって、歴史の流れにあって非常に大きな役割を果たしてきている。

今回の訪中に当たって会長は「中国の人民と中国の地で接触することのみが望みである」と語っていたが、同首相との会見によって日中の世々代々の友好への意思が確認され、両国の若い世代へ受け継がれていくことを考えるならば、会見は極めて有意義なものとして、時の経過とともにますます明らかになろう。

会見のあと池田会長は周首相の印象を「極めて精神力が強じんであり、これで体を動かしているとの感を深くした」と語った。また同首相は「**体は元気になりつつある**」と語ったという。

「聖教新聞」1976（昭和 51）年 1 月 10 付 第一面

周恩来首相の死を悼む

池田会長

周首相は新生中国を築き、世界の平和のために不滅の業績を残した実に偉大な指導者であった。

長い闘病の中にあっても、その眼底の中には八億の人民を率いた鋭い光をうかがうことができた。その生命力の強靭さと意志力を秘めつつも、表面は実に温かい人であった。

この会談中、日中平和友好条約に対する深い理解と誠意を感じた。そして、**二十世紀の最後の二十五年間は大事な時期であり、中国は超大国の道を歩むのではなく、平等の立場で平和へ努力していく**旨語ってくれた。この短い言葉の中にも未来を鋭く見つめている不世出の指導者であるという感慨を抱いた。

周首相は更に追憶の懐かしさをたたえながら「**五十数年前、桜の咲くころ日本をたちました**」と話し、桜の咲くころという表現に日本への親しみを感じ、私は「**是非また来てください**」と言うと「**願望はあるが無理でしょう**」とのことだった。その後とも、私は周首相の健康を祈ること切であった。

「大阪の心・『周恩来戦友』のこと」（井上靖との往復書簡『四季の雁書』1976（昭和 51）年 1 月 14 日の書簡）[5]

周首相とは、一昨年十二月、私の二回目の訪中の折り、北京市内の病院でお会いしました。あすは北京を去るという前夜、滞在中にお世話頂いた方々への、ささやかな答礼宴を行いましたが、それを終えたあとのことでありました。確か夜の十時近くでした。私達が着くと周首相は、わざわざ病院の玄関のところで待っておられ、にこやかに一人ひとりに手を差し出されました。

「**今回は病気も快方に向かっておりますので、どうしてもお会いしたいと思いました**」と周首相は語られました。

その半年前、私が初めて訪中した際には、かなり重い病状であるということを聞かされました。

---

[5] 『四季の雁書』1977（昭和 52）年 4 月 28 日発刊 潮出版社。『池田大作全集』第 17 巻に収録

それが快方に向かっているとのことで、いくらか安堵したのでありましたが、その病気がガンだったとは…

いま想えば、あの時は小康状態を保っていたのでしょうが、夜遅くにわざわざお会いいただいた周首相の心に、改めて胸打たれます。精悍な、しかし柔和さをたたえた眼光は、さすが秋霜の歳月をくぐり抜け、烈風のなかを歩んできた一級の指導者のものでありました。溢れ出づる精神の力が、病気の進行を一時抑え、止めていたのかも知れません。

私ども訪中の一行と記念撮影のあと、会見は病院の一室で行われました。私と妻が同席しましたが、私はともあれ健康であられるよう祈らずにはおられませんでした。「**八億の人民のため、いつまでもお元気でいてください**」ということを、私は自然のうちに口にしていました。それにも丁寧に礼を述べられる周首相の誠実な人柄が、今も深く印象に残っています。

その時の会談は周首相の病気への心配もあり、二十分ほどで終わり、辞去いたしましたが、二つのことが想い起こされます。

一つは、**これから二十一世紀までの二十五年が人類にとって極めて重要な時期となる**ことを、鋭く指摘していたことです。それと、日本に親しみをもち、日中の友好を政治次元を超えて願っていることを実感しました。また、それこそが友好の真の在り方を示しているといえるでしょう。

周首相は懐かしそうに「**五十数年前、桜の咲くころ、日本を発ちました**」と、目に追憶の情をたたえつつ、話していました。私が「**ぜひまた桜の咲く頃にいらしてください**」と申し上げると、**その願望はあるが実現は無理でしょう**、ということでした。今にして想えば、周首相は自分の生命の灯が次第に燃え尽きていくことを、自覚しておられたのかも知れません。それまでの周首相は、日本からの友人に、日本を訪ね、懐かしく思う所を訪問してみたい、と語っていたのですから。

「核軍縮及び核廃絶への提唱」（1978（昭和53）年５月に国連軍縮特別総会宛に送った書簡）[6]

「**二十世紀の最後の二十五年は、世界にとって最も大事な時期です**」――一九七四年十二月、今は亡き中国の周恩来首相が、会談の際にこう語っていた一言が、今も私の耳元にあります。

私達は次の世代の運命について、決して無関心ではいられません。そのなかで最大の懸案が核軍縮であることは、論をまちません。

「周恩来首相と桜」（『サンデー毎日』1978（昭和53）年８月20日号 新連載エッセイ「忘れ得ぬ出会い３」）[7]

車は夜のとばりのおちた北京市内を走った。中日友好協会会長の廖承志氏と同理事の林麗韞さん、それに私の妻が同乗していた。北京飯店より十五分ほど走ったであろうか。昭和四十九年十二月五日のことである。

---

[6] 『潮』1978（昭和53）年７月号 第230号 特別寄稿に掲載 潮出版社。『池田大作全集』第１巻に収録

[7] 『サンデー毎日』第57巻第36号、1978（昭和53）年８月20日号。後に『忘れ得ぬ出会い』として1979（昭和54）年５月３日に発刊 毎日新聞社。『池田大作全集』第21巻に収録

車から降りて玄関を入ると、今は亡き周恩来総理が出迎えておられた。会見の場所は、北京市内の病院と、あとで聞いた。しゃんと伸ばした背筋、意志の強さを物語る濃い眉毛、握手する目は相手の心を射るような、それでいて柔和さをたたえた目であった。（中略）入ったところで、私ども訪中の一行と記念撮影が行われた。照明が整い、撮影のための台が設定されていた。

（中略）

会見には廖承志会長、孫平化中日友好協会秘書長らが同席し、通訳は林麗韞女史があたった。

「**二度目の訪中ですね**」会見の冒頭でこう言われた。一回目の訪中は、この半年前の六月。そして同じ年の師走に再び訪中したのである。首相はこうした経緯を知悉しておられた。

最初の時は病気がひどい時分で会えなかったが、病気も快方へ向かっており、会えて嬉しい——氏は包み隠しなく、ご自分の病気のことにもふれられるのであった。

（中略）

「**鄧小平副首相に会われましたか**」とも聞かれた。その内容や模様について、詳細を知ったうえで臨まれていることは明らかだった。

話の折りに「**今の中国は、まだ経済的に豊かではありません**」と語るなど、周恩来首相はありのままにものを言われる。

（中略）

「**私たちには毛主席の指導があります**」会見の席で、周恩来首相は、なんの気負いもなく強調していた。中国にとって最も幸せだったのは、毛沢東と周恩来という二人のあいだに、絶対の同志愛に基づく信頼があったことであろう。

（中略）

いわば中国の人びとにとって、毛沢東は“父”であり、周恩来は“母”であったといってよい。

「**二十世紀の最後の二十五年は、世界にとって最も大事な時期です**」淡々と語る言葉が、今も耳元に鮮やかである。いやそのためにこそ“あの時”を、強靭な精神と気迫で生き抜いていたのだ、とも思えるのである。

会見は約三十分だったが、私は率直なところ、体は相当弱っており、直観的に長くは生きられないのでは……と感じた。長時間になることを遠慮もした。「**八億の人民のためにもどうぞお大事に**」と切に健康を祈らずにはおれなかったものである。

（中略）

氏は礼節の人であった。帰るさいにもわざわざ玄関まで見送られたのには、恐縮したものである。

「**私は五十年前、桜の咲く頃に日本を発ちました**」

遠く過ぎし方を振り返るような口調に、思わず「**ぜひとも桜の花が咲くころ、日本にきてください**」と申し上げた。「**願望はありますが実現は無理でしょう**」との答えだったが、その通りになってしまった。

中日友好協会主催歓迎宴のあいさつ（1978（昭和53）年９月17日 北京・人民大会堂）[8]

周恩来総理が、亡くなられる一年前に私に会ってくださり「中日平和友好条約」の早期締結を語っておられたことを、つい昨日のように鮮明に記憶しております。周総理がご健在であれば、どれほどか、この調印を喜ばれたことでありましょう。

あのとき、周総理は「**二十世紀の最後の二十五年は、世界にとってもっとも大事な時期です**」と語っておられました。今回の条約は、周総理のご遺言の実現とも確信するのは私一人ではないと思います。

「新たな民衆像を求めて」（北京大学での講演 1980（昭和55）年４月22日 北京大学臨湖軒）[9]

ともあれ時代は“大動乱”の時であります。故周恩来首相は、**二十一世紀へ至る二十世紀の最後の四半世紀は最も重大な時期である**、と述べておられました。それだけに民衆同士の、国境を超えた世界的な連帯がなされなければ、いつまた戦争の惨禍にさらされてしまうかわかりません。

「周恩来総理の思い出」（『大白蓮華』1990（平成２年）７月号 対談 敦煌の光彩 第六章 万代の友好の絆）[10]

常　会見では、どのようなことが話し合われましたか。

池田　一つは「中日平和友好条約」に対して、周総理は、**速やかに締結できるよう希望する**と話されました。この条約については、周総理にお会いする前に、私も締結を主張しておりました。

（中略）

池田　会談の折、周総理が、若き日に日本に留学されたことを振り返られ、「**私は五十年前、桜の咲くころに日本から帰国しました**」と語られたことも忘れられません。私は「**桜の花の咲くころ、ふたたび日本を訪問してください**」と申し上げました。周総理は、もう、ご自身のことを自覚されていたのでしょう、「**その願望はありますが、実現は無理でしょう**」と語られました。その一年あまり後には、残念なことにご逝去の報を聞かねばなりませんでした。（中略）周総理は「**二十世紀の最後の二十五年間は世界にとって大事な時である**」と言われ、**おたがいに平等な立場で助け合い努力していきましょう**、と私に語っておられました。

池田　私はご逝去の悲報を聞き、深い感慨とともに、ご冥福を祈りました。病気がガンであったことも知りました。「**今回は病気も快方に向かっておりますので、どうしてもお会いしたいと思いました**」と語られたことが思い出され、胸に迫ってまいりました。あのときは強靭な精神力で、内外の難問題に対処されていることが、ひしひしと感じられました。

8　後に『広布第二章の指針』第14集として1979（昭和54）年４月２日に発刊 聖教新聞社

9　後に『21世紀文明と大乗仏教』として1996（平成８）年５月３日に発刊 聖教新聞社。『池田大作全集』第１巻に収録

10　後に『敦煌の光彩』として1990（平成２）年10月30日に発刊 ㈱徳間書店。『池田大作全集』第17巻に収録

「新しき人類意識を求めて」（マカオ東亜大学での講演 1991（平成 3）年 1 月 30 日）マカオ東亜大学カルチャー・センター[11]

私は、周総理とは逝去の一年前、一九七四年十二月、第二次訪中の折にお会いし、また夫人の鄧穎超女史とは今にいたるまで深い友誼を結んでおりますが、周総理の振る舞い、言動は、自らを厳しく律する精神の風格に満ちておりました。

当時、周総理は、病気療養されていたため、北京市内の病院での会見でありましたが、病身にもかかわらず、わざわざ玄関まで出迎え、帰りには見送ってくださった。私はその礼節に心打たれたことを今でも鮮明に覚えております。会見の部屋も質素でした。

また「**今の中国は経済的に豊かではありません**」と率直に心情を吐露されながら、平等互恵にして世々代々にわたる人民の友好を展望されていた。私は、そこに和を重んじ、自らを抑制する謙譲の美と、信念に徹する強靭な意志力を垣間見た思いでした。その思いを込めて、創価大学には「周桜」と「周夫婦桜」を植え、亡き総理をしのんでおります。

「中国・周恩来総理」（聖教新聞 1997（平成 9）年 11 月 1 日付第 1･2 面 世界の指導者と語る第 2 部第 38 回）[12]

「**五十年前、桜の咲くころに、私は日本を発ちました**」周総理の声が蘇る。

その桜とは、ここ京都の桜であったにちがいない。

「**もう一度ぜひ桜の咲くころに来てください**」

そう申し上げると、「**願望はありますが、実現は無理でしょう**」

逝去の一年一カ月前であった。昭和四十九年（一九七四年）十二月五日である。

あの日、すでに総理の体は、深く病んでいたのである。

お会いしてすぐ総理は言われた。

「**二回目の訪中ですね。最初の訪中のときは、病気がひどい時分で、どうしても、お会いできませんでした。**」と。

（中略）

あの夜、玄関を入るや否や、そこに総理は立って待っていてくださった。

私は近寄った。「**よくいらっしゃいました**」。総理は私の手を強く握ってくださった。まばたきもせず目を見つめられた。この上なく鋭く、それでいて限りなく優しい目であった。この目が見落とすものは何もないという目であった。総理の全身からにじみ出る何かがあった。

相見ぬうちから、会っていた。心では、お会いしていた。心に映じていたとおりの方であった。

「**まず記念撮影しましょう**」。撮影の準備が、もう整っていた。私ども訪中の一行と撮影の台に

---

[11] 後に『21 世紀文明と大乗仏教』として 1996（平成 8）年 5 月 3 日に発刊 聖教新聞社。『池田大作全集』第 2 巻に収録

[12] 後に『私の世界交友録Ⅱ』として 1998（平成 10）年 1 月 26 日に発刊 読売新聞社。『池田大作全集』第 123 巻に収録

並ばれた。

（中略）

撮影が終わると、「**どうぞ、こちらへ**」。そう言って先に立って歩かれる。後ろから見ると、総理の背中が薄くなっているのが、人民服の上からもわかった。ただ気力だけで立っておられる――私は総理がお疲れにならないように、私と妻だけが会見の部屋に入ることにした。

（中略）

あの時、総理の思いはただ「自分なきなと」の一点に向けられていた。

「**二十世紀の最後の二十五年間は、世界にとって最も大事な時期です。すべての国が平等な立場で助けあわなければなりません**」

（中略）

私にも「**あなたが若いからこそ、大事につきあいたいのです**」と言われた。この時、総理七十六歳。私は四十六歳。「**中国は、決して超大国にはなりません**」とも言っておられた。

総理の信条は「もし中国が将来、超大国になり、世界で覇権を求めるようなことがあれば、世界の人民が立ち上がって、中国の人民と手をつなぎ、これを打倒してほしい」ということであった。

「**今の中国は、まだ経済的に豊かではありません**」とも。その言葉の裏には、中国は、決してこのままではない、これからの中国は違いますという深い決意があられたと思う。

（中略）

自分の栄達など眼中になかった。ただ人民のためであった。そのためだけに全身全霊を捧げきっておられた。

「**中日平和友好条約の早期締結を希望します！**」鋭き声であった。私は「**総理のご意思は必ず、しかるべきところに伝えます**」とお約束した。

（中略）

会見の間じゅう、私は、総理の計り知れぬ気迫を一身に感じていた。このまま、一時間でも二時間でも語り通してしまいそうな強靭な精神力であった。

私は、何度も時計を見て、廖会長をうながした。会長は、そのたびに「まだいい、まだいい」と合図される。結局、会見は約三十分におよんでしまった。

おいとまする際にも、総理が、あの体で、わざわざ玄関まで見送ってくださったことを私は忘れない。一期一会。最初の出会いが最後の語らいとなった。

私は総理に、記念に一枚の絵画を贈った。総理は、それまでの絵を取り替えて、部屋に飾ってくださったという。

「周総理との会見の通訳 林麗韞さん」（聖教新聞 2000（平成 12）年 6 月 10 付第 1・2面 世界の指導者と語る第 4 部第 15 回）[13]

林先生の回想を、そのまま紹介させていただきたい。

「三〇五病院で会見が始まって、しばらくたって、一枚のメモが私にまわってきました。それは医師からのメモで、『総理、そろそろお休みください』と書いてありました。私は、それをそっと周総理に渡したのですが、総理はそれに目も通さずに、池田先生と会談を続けられたことを、よく覚えています」

「強く印象に残っている言葉が二つあります。

一つは、周総理が池田先生に言われた『**今世紀最後の二十五年は、とても重要な時期です。あなたのような方が必要とされているのです**』という言葉。池田先生と創価学会に、強い期待をかけておられたのです。

もう一つは、池田先生の『**桜の咲く季節に、ぜひ日本にいらしてください**』というお誘いに対し、周総理が『**希望はあります。が、実現は無理でしょう**』とお答えになったことです。命の火がもう消えかかっていることを、総理自身がよくご存じだったのです」

「通訳は文化交流の生命線」（『大白蓮華』2000（平成 12）年 5 月号 私の人生記録第 2 部第 11 回）[14]

周恩来総理は、痩せてはおられたが、背筋をピンと伸ばされ、毅然とした姿で出迎えてくださった。

会見は、「**二度目の訪中ですね**」との総理のあいさつで始まった。強靭な精神力で、気力を振り絞るようにして、一言一言を発しておられた。

忘れられない言葉が、今も耳朶に残っている。「**二十世紀の最後の二十五年は、世界にとって最も大事な時期です**」という指摘だった。

「『人間修行の坂』を登りゆけ」（創価教育同窓の集いスピーチ 1997（平成 9）年 11 月 3 日 創価大学）[15]

私は、周恩来総理とお会いした折、総理が、三十歳も若い私に「**閣下**」と呼びかけてくださったことを、忘れることができない。

学生や青年を見下して、「××君！」と呼びつけたりする指導者は傲慢である。人を尊敬できないのは、近年の日本人の欠点である。

---

[13] 後に『地球市民の讃歌 世界の指導者と語るⅡ』として 2002（平成 14）年 2 月 25 日に発刊 潮出版社

[14] 後に『大道を歩む 私の人生記録 Ⅲ』として 2002（平成 14）年 3 月 16 日に発刊 毎日新聞社。『池田大作全集』第 127 巻に収録

[15] 「聖教新聞」1997（平成 9）年 11 月 5 日付第 2 面に掲載、後に『創立者の語らい Ⅵ』として 1999（平成 11）年 11 月 18 日に発刊 創価大学学生自治会。『池田大作全集』第 142 巻に収録

中国・南開大学「名誉教授」、周恩来研究センター「名誉所長」授与式での謝辞　1998（平成10）年11月25日[16]

私は今、周総理とお会いした、二十四年前のあの十二月五日の忘れ得ぬ夜を思い起こします。周総理は、強く私の手を握り、千年先まで見通すような鋭い、それでいて柔和な、何とも言えない眼差しで、私の目をじっと、ご覧になっておられました。総理は言われました。「**池田先生は二度目の訪中ですね。六月にいらっしゃった時には、病気がひどい時分で、お会いできませんでした。今回は、どうしても、お会いしたいと思いました。お会いできてうれしいです**」と。この時の会見記録は、克明に残っております。後世のために、その一端を紹介させていただきたい。

周総理は、すべての経緯をご存じの様子で、こう語られました。

「**これまで中国にこられた人たちが、池田先生への尊敬を込めて、私に言っておりました。“私たちの訪中は、池田先生から『中国と友好を結ぶように』という指導があったからです。中日国交への努力は、池田先生の指導の賜です”と、私は聞いております。創価学会は、中日友好に尽力されました。これは、私たちの共通の願望です。ともに努力していきましょう！中日平和友好条約の早期締結を希望します！**」と。政治家でもない私に、そう言われたのである。さらに、総理は、地球全体を展望するかのような表情で、「**二十世紀の最後の二十五年間が、世界にとって最も大事な時期です。全世界は、平等に、お互いに立場を尊重しあいながら、仲良くしていくべきです。励まし合っていくべきです**」と、三十歳年下の私に、後事を託すがごとく語ってくださったのであります。

中国・浙江大学「名誉教授称号」授与式での謝辞 2002（平成14）年11月2日 創価大学[17]

周恩来総理は、私との語らいのなかで、強調されました。

“**二十一世紀への指標として、「平等互恵」の精神を、絶対に忘れてはならない**”と。

国であれ、人であれ、皆、平等である。皆、尊厳である。傲慢や侮辱は許されない。

「平等互恵」こそ、創価大学が掲げゆく、世界市民の「友情の哲学」であり、「平和の信念」である――この精神で、わが創大は進んでいこうではありませんか！

中国・北京師範大学「名誉教授称号」授与での謝辞　2006（平成18）年10月7日 創価大学[18]

周恩来総理とお会いしたのは、一九七四年の十二月五日。寒い寒い北京の夜でありました。

総理が入院先に招いてくださり、私と妻と二人で会見させていただきました。そのすべての言葉が、今もって私の耳朶から離れません。

周総理は、私が大学・学園を創立したことも、よくご存じで、「**教育に力を入れておられるこ**

[16] 「聖教新聞」1999（平成10）年11月26日付第3面に掲載、『池田大作全集』第89巻に収録

[17] 「聖教新聞」2002（平成14）年11月3日付第3面に掲載、後に『創立者の語らい 11』として2004（平成16）年9月30日に発刊 創価大学学生自治会。『池田大作全集』第143巻に収録

[18] 「聖教新聞」2006（平成18）年10月8日付第3面に掲載、後に『創立者の語らい 18』として2008（平成20）年8月24日に発刊 創価大学学生自治会

とが素晴らしいですね」と過分な賞讃をいただきました。

（中略）

周総理は、若き日の日本留学の思い出も、私に淡々と語られました。

その心をしのびつつ、私は会見の翌年、日本の大学として真っ先に、新中国からの留学生六人を創価大学にお迎えしたのであります。

そして、周総理が大変お好きであった桜を大学に植樹し、「周桜」と命名させていただきました。

総理は、**青春時代、日本の留学から帰国したのは、桜の季節であった**と回想されておりました。

ブラジル哲学アカデミー「名誉博士号」授与式での謝辞 2007（平成 19）年 4 月 2 日 創価大学[19]

周総理は、私に対しても、まっすぐに目を見つめ、固く手を握り、未来を託すように言われました。

「**我々は世々代々にわたる友好を貫かねばなりません**」

「**全世界の人々が、お互いに平等な立場で、助け合い、努力することが、必要です**」と。

今年は、中国と日本の「国交正常化」から三十五周年の大きな佳節を刻みます。

中国・大連大学「名誉教授称号」授与式での謝辞（メッセージ）2008（平成 20）年 12 月 3 日 創価大学[20]

寒風が吹く十二月に入ると、私の胸に、ひときわ鮮烈に蘇る出会いがあります。

それは、一九七四年（昭和四十九年）の十二月五日、寒い寒い北京の夜、敬愛してやまぬ人民の大指導者・周恩来総理に温かくお迎えいただいた思い出であります。

当時、周総理は七十六歳であられました。私は四十六歳。奇しくも、きょう、お迎えした若き潘学長と同じ年齢でありました。

総理は、三十歳も若い私に、中国と日本の友好の未来を託してくださいました。そして、「**すべての国が、平等な立場で助け合わねばならない**」と語られたのであります。この総理の慧眼は、「調和」と「共生」を希求する現代にこそ、いやまして輝きを放っております。

中国・天津外国語大学「名誉教授称号」授与式での謝辞（メッセージ）2014（平成 26）年 5 月 16 日 天津外国語大学[21]

思えば四十年前、周恩来総理は、三十歳若い私の目を真っ直ぐに見つめられながら、語ってく

---

[19] 「聖教新聞」2007（平成 19）年 4 月 3 日付第 3 面に掲載、後に『創立者の語らい 19』として 2009（平成 21）年 1 月 26 日に発刊 創価大学学生自治会

[20] 「聖教新聞」2008（平成 20）年 12 月 4 日付第 3 面に掲載、後に『創立者の語らい 20』として 2010（平成 22）年 5 月 3 日に発刊 創価大学学生自治会

[21] 「聖教新聞」2014（平成 26）年 5 月 18 日付第 3 面に掲載、後に『創立者の語らい 24』として 2018（平成 30）年 1 月 2 日に発刊 創価大学学生自治会

ださいました。

「**中日友好が今日まで発展できたのは、私たち双方の努力の成果であり、そして、私たちは、その努力をこれからも続けていくよう希望します**」

さらにまた、「**全世界の人々が、お互いに平等な立場で助け合い、努力することが必要です**」と。

凛然とした総理の信念の声は、今も私の心に轟いて離れることはありません。

会見の最後に、周総理は、美しい日本語で「**さようなら！**」と見送ってくださいました。

何とも言えない温かな慈愛に満ちた響きの一言でありました。私は即座に「**謝謝！**」と中国語で返礼を申し上げました。

一期一会となった、この平和への語らいを、両国の青年たちに、さらには世界の若き世代にも託していきたい――そのための友情と信頼の道を限りなく開いていくことを、私は決意いたしました。

附属資料　小説「新・人間革命」会見該当箇所

小説「新・人間革命」3751～3754「信義の絆」22～25（聖教新聞 2007（平成 19）11 月 23 日～ 27 日）[22]

この時の周総理の体調は、決して会見などできる状況ではなかったのである。

周総理の医師団も、こぞって、伸一との会見に反対したのだ。

「総理、もし、どうしても会見するとおっしゃるなら、命の保証はできません！」

だが、毅然として周総理は言った。

「**山本会長には、どんなことがあっても会わねばならない！**」

よほどの思いがあるにちがいない。その言葉に医師団は困惑した。やむなく、総理夫人の鄧穎超に相談し、説得してもらうことにした。

しかし、鄧穎超は周総理の意志を尊重した。

「恩来同志が、そこまで言うのなら、会見を許可してあげてください」

伸一に対する総理の深い心を、夫人は感じ取ったのであろう。

ホテルを出発する前、伸一は、廖承志会長に言った。

「周総理との会見の場には、私と妻だけが入ります。大勢と話をするとなれば、総理がお疲れになりますから」

伸一は、それが自分たちにできる、せめてもの配慮であると思った。

外に出た。外気は肌を刺すように冷たかった。気温は零下であろうか。

一行は、乗用車に分乗した。暗い道を、かなりのスピードで進んだ。十五分ほど走ったころ、ある建物の前に着いた。

---

[22] 後に『新・人間革命』第 20 巻として 2009（平成 21）年 10 月 12 日に発刊 聖教新聞社

周総理が入院中の三〇五病院であった。車を降りて中に入ると、そこに、人民服を着た周総理が立って、待っていてくれた。

「**ご静養中にもかかわらず、お会いいただき、ありがとうございます**」

伸一が右手を差し出すと、総理は微笑を浮かべて、その手を握った。

「**よくいらっしゃいました**」 伸一は、総理の右腕を支えるように、そっと左手を添えた。

総理は革命闘争のさなかの一九三九年（昭和十四年）、落馬がもとで右肘の上部を骨折した。その後遺症で右腕が曲がったままになったことを、伸一は知っていたのだ。

総理の手は白かった。衰弱した晩年の戸田城聖の手に似ていた。伸一は胸を突かれた。

二人は、互いに真っすぐに見つめ合った。

伸一は、痩せた総理の全身から発する、壮絶な気迫を感じた。

時刻は十二月五日午後九時五十五分であった。

（中略）

周恩来総理は、にこやかに語りかけた。「**まず、みんなで記念撮影をしましょう**」

そして総理は、同行のメンバー全員に声をかけながら、握手をした。

総理との記念撮影とあって、皆、緊張した顔でカメラに納まった。

撮影が終わると、総理は伸一に言った。「**どうぞ、こちらへ**」

事前の打ち合わせ通り、伸一と峯子だけが会見の部屋に入った。

席に着くと、周総理は、伸一たちに静かな口調で語った。

「**山本先生は、二度目の訪中ですね。前回、来られた時は、私の体調が最も悪い時期で、お会いすることができませんでした。しかし、少しずつ、病状も快方に向かっておりますので、どうしてもお会いしたいと思っておりました。今回はお会いできて、本当に嬉しい**」

周総理は七十六歳、伸一は四十六歳である。総理は、伸一の若さの可能性にかけていたのかもしれない。

「偉大なことをなしとげるには、若くなくてはいけない」とはゲーテの箴言である。

新しき力が未来をつくる。ゆえに、全精魂を注いで、若い世代を大切に育てるのだ。

会見の通訳をしてくれたのは、中日友好協会の林麗韞理事であった。

峯子は、総理と伸一のやりとりを、懸命にノートに書き留め始めた。

彼女は、これは重要な歴史的な会見になるにちがいないと思った。しかし、会見会場に記者は入っていなかった。峯子は、責任の重大さを感じながら、必死になってペンを走らせた。

周総理は、中国と日本の友好交流に対する、伸一のこれまでの取り組みを、高く評価していた。

「**山本先生は、中日両国人民の友好関係は、どんなことがあっても発展させなければならないと、訴えてこられた。私としても、非常に嬉しいことです。中日友好は私たちの共通の願望です。共に努力していきましょう**」

静かな話し方ではあったが、総理の声には力がこもっていた。伸一は、その言葉に、中日友好の永遠の道を開こうとする、総理の魂の叫びを聞いた。また、平和のバトンを託された思いがした。

（中略）

総理は、これまでの中日友好の発展は、私たち双方の努力の成果であると述べた。そして、目を輝かせて語った。

「**私は、未来のために中日平和友好条約の早期締結を希望します**」

それから総理は、念を押すように言った。

「**午前中、鄧副総理と話し合われましたね。副総理をはじめ、関係者から、山本先生のお話は伺っております。それらの問題については、私の方から、多くを話さなくてもよろしいですね**」

ソ連のことなども、周総理の耳には、しっかりと入っているようだ。

「**はい。総理のお体にさわりますので、すぐに失礼させていただきます**」

すると総理は、ゆっくりしていくようにと静かに首を左右に振り、伸一と峯子に視線を注いだ。そして、二人の出身地を尋ねた。伸一が答えた。

「**二人とも東京です。東京の江戸っ子気質というのはさっぱりとしていて単純なんです。賢くありません。私たちも、二人で一人前なんです**」

伸一はユーモアで答えた。総理に、少しでも心を和ませてほしかったのだ。配慮は真心の表れである。

総理は、愉快そうに声をあげて笑った。初めて聞く笑い声であった。

それから総理は、彼方を見るように目を細め、懐かしそうに語った。

「**五十数年前、私は、桜の咲くころに日本を発ちました**」

伸一は、頷きながら言った。

「**そうですか。ぜひ、また、桜の咲くころに日本へ来てください**」しかし、総理は寂しそうに微笑んだ。

「**願望はありますが、実現は無理でしょう**」

伸一は胸が痛んだ。

その時、通訳の林麗韞のもとに、一枚のメモが回ってきた。

伸一は、この時は知る由もなかったが、そこには「総理、そろそろ、お休みください」と記されていたのである。医師団からのものであった。

彼女は、メモを総理に渡した。

しかし、総理はすべてわかっているらしく、メモに目を通すことなく、話し続けた。

周総理には、命を縮めても、今、会って、伸一と話しておかなければならないとの、強い思いがあったようだ。

伸一は、総理を疲れさせてはならないと思い、自分の方から積極的に話をすることは避けた。

また、同席していた中日友好協会の廖承志会長に、会見を切り上げた方がいいのではないかと、何度か目配せした。

しかし、廖会長は、そのたびに、“まだいい”と合図を返してきた。

伸一は、自分の思いを口にした。

「**周総理には、いつまでもお元気でいていただかなくてはなりません。中国は、世界平和の中軸となる国です。そのお国のためにも、八億の人民のためにも……**」

すると総理は、力を振り絞るようにして語り始めた。

「**山本先生は、中国は中軸と言われましたが、私たちは、超大国にはなりません。また、今の中国は、まだ、経済的にも豊かではありません。しかし、世界に対して貢献はしてまいります。二十世紀の最後の二十五年間は、世界にとって最も大事な時期です。全世界の人びとが、お互いに平等な立場で助け合い、努力することが必要です**」

「**まさに、その通りだと思います**」

伸一は、遺言を聞く思いであった。

会見は、三十分に及ぼうとしていた。伸一は、周総理といつまでも話し合っていたかった。しかし、もうこれ以上、時間を延ばしてはならないと思った。

彼は、「**総理のご意思は、必ず、しかるべきところにお伝えします。お会いくださったことに、心より御礼、感謝申し上げます**」と言って、会見を切り上げた。

伸一は、周総理に、ささやかな記念の品として“萩と御所車”の日本画を贈った。

総理は、その夜から、それまで部屋に飾ってあった絵を、伸一が贈った絵に掛け替えたという。

中国の古典には「二人心を同じくすれば、その利きこと金を断つ」とある。強い友情は、どんなに固い金属をも断つ力になるというのだ。

周総理と伸一は、これが最初で最後の、生涯でただ一度だけの語らいとなった。

しかし、その友情は永遠の契りとなり、信義の絆となった。総理の心は伸一の胸に、注ぎ込まれたのである。